

# 教育新聞

発行所 教育新聞社  
 〒101-0051  
 東京都千代田区神田神保町1-40  
 代表 ☎ 03 (3295) 7051  
 FAX 03 (3295) 7054  
 URL <http://www.kyobun.co.jp>  
 E-mail [kyoiku@kyobun.co.jp](mailto:kyoiku@kyobun.co.jp)  
 購読料 2625円（月額、税込）  
 振替口座 00170-6-4369  
 ©教育新聞社 2012  
**週2回 月・木発行**

## 放射線量を気にせず教育活動 児童は泳ぎ草花や土に触れた

福島県では、津波と原発事故の影響により、6万人が県外へ避難し、10万人が故郷を離れて生活せざるを得ない状況が続いている。太平洋側では、まだ再開できない小・中学校がある。仮置き場が決まらなため、除染も思うように進んでいない地域も多い。いまだにホットスポットがあり、高濃度の放射線の影響も懸念されている。

そうした中で伊達市では、今年度からNPOの支援も受け、教育活動の場を新潟県見附市の同規模の学校に移して教育活動を進める「移動教室」の取り組みを始めた。本校の5・6年生は、6月

26日から28日までの3泊4日、見附市立田井小学校との交流授業を実施してきた。その様子は、インターネットテレビ会社のサイトなどで見ることもできる（<http://www.ourplanet-tv.org/?q=node/1437>と<http://www.youtube.com/watch?v=un8ivclghv4>など）。

以下に、その取り組みについて考察する。

1. 福島県（特に、放射線の影響が危惧される地域の学校）を離れての教育活動の意義

①放射線の影響を気にせずプールなど、精一杯の教育活動を進めることができる。

②草花や土など、自然とおきなくふれあうことにより、発達段階からも大切な豊かな情操を養うことができる。

③家庭を離れて生活すること

④生活や学校の環境の変化に、早期に慣れて日常生活を

送る、環境適応能力が育成される。

2. 3泊4日の「移動教室」

①往復の移動以外は、教科の学習を進めることができ、時数確保に支障をきたさな

②交流活動により、自分の住む地域の伝統文化の素晴らしさの確認ができ、また合同授業を通して、子どもたちが、多くの考え方や授業スタイルにふれることができる。

③授業を通じた他校の子どもの交流により、新たな人間関係のりためのコミュニケーション力の育成を図ることができる。（少人数の学校で6年間、同じ人間関係の

④多くの人々から思いやりや親切を受けた子どもたちの心の中には、その親切を次（他）の人々につなぎ伝える「恩返し」の心が芽生えている。

⑤土地としての「ふるさと」を失いつつある福島県の放射線量の高い地域の子どもたちにとって、「原風景」「原体

験」としての共通体験は、「心ふるさと」を作ってあげることなる取り組みであると考えられる。

③リラックスした雰囲気の中で、自分の力を出しきった活動に取り組むには、失敗を認め支えてくれる仲間や担任教師の存在が不可欠である。

④遠く離れた場所での学校



田井小学校5・6年生から「みつば太鼓」を教わる富野小の子どもたち

・学年・学校ごとの移動教室は、児童・教師にとっても直接体験であり、大きな教育的意味と意義があるとされている。

様々な課題のあるこれからの日本の教育にとって、被災地以外でも取り組む意義のある教育活動ではないだろうか。

### 宿泊移動教室で教育を変える

#### 伊達市の挑戦

福島県伊達市立富野小学校長 戸 仙助